

第2回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会 会議録

日時：令和3年7月15日（木）18時開会

場所：北海道経済センター 8階Aホール（札幌市中央区北1条西2丁目）

出席：浅香委員、大西委員、岡本委員、梶井副会長、川島委員、木村委員*、定池委員*、佐藤（大）委員、佐藤（理）委員、椎野委員、柴田委員、尚和委員、高野委員、高橋委員、中田委員、原田委員*、平本会長、牧野委員、松田委員、山中委員、山本（一）委員、山本（強）委員、吉岡委員*（*…オンライン出席）

事務局：浅村政策企画部長、本山企画課長、田中企画係長

1. 開 会

○事務局（本山企画課長） 定刻となりましたので、第2回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会を開会いたします。

私は、札幌市まちづくり政策局政策企画部企画課長の本山でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議につきましては、札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会条例第4条第2項により、委員の半数以上の出席が必要となります。本日の出席者は、委員総数25名のところ、オンライン出席も含めて22名の委員にご出席をいただいております。また、オンライン参加の原田委員からは遅参する旨の連絡がありましたことをご報告申し上げます。

それでは、議事進行については、平本会長にお願いしたいと存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議 事

○平本会長 皆様、こんばんは。

今日も、お忙しいところをお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、時間も限られておりますので、早速ですが、議事に入ります。

まず、一つ目の議題である審議会のスケジュールについてです。

事務局よりご説明をいただきたいと思っております。

○事務局（本山企画課長） 資料1の審議会・専門部会スケジュールをご覧ください。

こちらは、策定スケジュールの見直し案を示したものとなります。

さきの定例市議会においては、新型コロナウイルスの感染拡大により、社会経済活動に大きな変化が見られる中、ポストコロナの社会をしっかりと見据えた戦略を検討するため、時間の許す限り、今後の動向を慎重に見据える姿勢も必要ではないかとの議論がありました。札幌市としても、5月に予定していた審議会を延期したことや、コロナ対応の中、市

役所全体での議論が予定どおりに進んでいないことなどもあり、策定スケジュールの見直しを検討したいとのやり取りをしたところでございます。これを受けまして、改めて審議会関係のスケジュールを見直したものが赤色の枠内の見直し案となります。

会議については、審議会と専門部会を合わせて、おおむね2か月に1回の開催を想定しております。

ビジョン編の答申は令和3年度内を予定しており、パブリックコメントの実施と議会の議決を経て、令和4年度の策定を考えております。また、これと並行して戦略編についても審議会において議論を重ねていただき、令和4年度中の答申を想定しております。

会議の開催回数は変わりませんが、審議期間を延ばすことで、当初予定していたスケジュールよりも若干余裕を持たせ、確実に検討を進めていくための変更案となります。

○平本会長 コロナの影響がある中でも、確実にきちっと審議をするため、スケジュールを若干繰り下げたというご説明をいただきました。

ただいまのご説明についてご質問等はございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本会長 それでは、今後、このような形で審議会と専門部会を進めていくこととなりますので、委員の皆様方、よろしくお願い申し上げます。

次に、本日のメインテーマとなります都市像及び基本目標についてです。

後ほど委員の皆様からもご意見を十分にいただきたいと思いますが、まず、まちづくり戦略ビジョンの構成イメージと上位の概念となります都市像及び基本目標について、事務局より資料に沿ってご説明をお願いいたします。

○事務局(本山企画課長) 資料2の第2次札幌市まちづくり戦略ビジョンの構成イメージをご覧ください。

左上の1の計画体系は、前回の審議会でもお示した計画の体系図となります。青色の三角形の部分がビジョン編であり、都市像や基本目標といった大きな方向性を示すものです。

続いて、2ではビジョン編の各章の構成案を示しております。

このうち、第2章では、札幌市の現在及び将来に関する考察の掲載を想定しており、前回の審議会でお示した策定方針や審議会における議論等を踏まえた内容をまとめていきたいと考えております。

その下の第3章の都市像及び第4章のまちづくりの基本目標については、本日の議題とさせていただきます。

二つの章の案は、この後にお示しますが、第4章のまちづくりの基本目標については本資料の右側に記載しているページ構成を想定しております。右側のページのとおり、基本目標からさらに踏み込んだ目指す姿や、私たちが取り組むこととして、市民・企業・行政の取組の掲載を想定しており、その内容については今後開催する専門部会で議論を深め

ていただきたいと考えております。

次に、資料3の都市像（案）をご覧ください。

都市像を導く考えとして大きく2点を記載しております。

1点目は、札幌市の人口はここ数年のうちに減少に転じることが見込まれますが、人口減少の緩和に取り組むことはもとより、支える側と支えられる側という従来の考え方を転換していくことで人口構造の変化にも影響を受けない都市を目指すことが必要と考えております。

2点目は、札幌市の魅力は北海道の自然や資源に支えられており、札幌市の発展は北海道の発展と一体的な関係にあることから道都であることを引き続き意識し、札幌ならではの感性と創造性を十分に生かしながらコロナ禍を契機に加速する社会変革にも果敢に挑戦し、躍動し続ける都市を目指すことが必要と考えております。

以上の考えから、中段に赤色の字で記載した現ビジョンの都市像を踏襲しつつ、より市民の生活に着目した「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」、続いて、北海道の中の札幌ということに着目した「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」の順番に都市像を掲げることを案としております。

なお、現ビジョンでは、都市像の章にまちづくりの方向性などの記載が一部ありましたが、基本目標などの他の章と重複する部分があったため、記載箇所等については、今後、精査していきたいと考えております。

次に、資料4のまちづくりの基本目標（案）をご覧ください。

まず、1の基本目標の設定の考え方についてでございます。

基本目標を考えるに当たっては、札幌市の現在及び将来に関する考察、策定方針や現ビジョンの検証、前回の審議会での議論と先ほどお話しした都市像を踏まえ、まちづくりに共通する三つの重要な概念を定めております。

まちづくりに共通する重要な概念として、ユニバーサル（共生）は、支える人と支えられる人という一方向の関係性を超え、双方向に支え合うこと、障壁や困難の解消、格差の是正、機会の均等、交流の促進、自然との共生などとしております。

ウェルネス（健康）は、誰もが幸せを感じながら生活し、生涯現役として活躍できること、身体的な健康、精神的な健康、社会的な健康などとしております。

スマート（快適・先端）は、先端技術等を活用し、まちの魅力、快適性を高めること、利便性の向上、生産性の向上、人材育成、ゼロカーボンなどとしております。

これら三つの重要概念を定め、この概念と札幌市のSWOT分析を基に考察を行い、基本目標を導いております。

三つの概念を念頭に置きつつ、SWOT分析を基に行った考察が2の基本目標（案）に黒色の丸でお示した内容となっており、三つの概念との関連を「U」「W」「S」のマークでお示ししております。

なお、関連を示すマークについては複数該当することが考えられる場合もありますが、

今回は主要なものを一つだけ記載しております。そして、黒色の丸に記載した考察の内容を精査し、導き出したものを20の基本目標として記載しております。さらに、これら20の基本目標を分野ごとにまとめ、八つの分野に分類しております。

内容につきましては事前に資料をご覧くださいと思いますので、ここでは、基本目標の1から3を例に、目標設定の考え方について説明をさせていただきます。

2の基本目標（案）の左上の点線囲みの子ども・若者分野の欄をご覧ください。

都市像（案）でも触れましたように、人口減少の緩和には引き続き取り組む必要があると考えております。この緩和に向けては、市民の希望出生率の1.65に対し、合計特殊出生率が1.12と下回っていることから、社会全体で子どもと子育て家庭を支えていることや性別を問わず働きながら子育てができる環境が整っていることが重要となります。

また、社会全体で虐待やいじめなどの子どもの権利が侵害される事態を防いでいることや若者の社会的自立を支えていることが重要です。

さらに、子ども一人一人が尊重され、心身ともに健康で、時代に即した内容、学び方の質の高い教育を受けていることが重要となります。

以上の考察から、基本目標（案）については、目標1として、安心して子どもを産み育てることができる、子育てに優しいまち、目標2として、誰一人取り残されずに、子どもが健やかに成長し、若者が希望を持って暮らすまち、目標3として、子どもたちが互いを尊重しながら学び合い、健やかに育つまちを設定し、これらの目標を子ども・若者分野として分類しております。

以降も考察から基本目標とそれを分類する分野を設定しており、計20の基本目標と八つの分野を掲げる案となっております。

次に、資料5のまちづくりの基本目標（案）現戦略ビジョンとの対比をご覧ください。

本資料は、現ビジョンのビジョン編に掲載している基本目標を左端の列にグレーの枠でお示ししております。

右側の青色の枠には、先ほどお話しした新しい基本目標の案を記載しております。右側の青色の枠には、現ビジョンの基本目標との対応関係を示しており、新しい基本目標で強化、追加されている点をお示ししております。同じ要素のものを一本化したり、逆に独立させたりと、再整理を行ったものもありますが、現ビジョンで扱っている基本目標の内容は全て網羅しております。

次に、参考資料のご紹介でございます。

参考資料は1から4までご用意しており、お配りしている資料の後半に添付をしております。

まず、参考資料1をご覧ください。

この資料では、都市像の変遷を紹介しております。

昭和46年に札幌市基本構想で設定した北方圏の拠点都市と新しい時代に対応した生活都市の二つの都市像については、その後、説明文の変更を行いながらも、約40年にわた

り継続して掲げてきたところでございます。

続いて、2ページ下段の平成25年策定の現ビジョンでは、人口減少社会の到来という時代の転換期を見据え、北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち、互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまちを掲げることとし、現在に至っております。

また、4ページには市民憲章を掲載しております。

市民憲章は、札幌をより豊かで明るく、住みよいまちにすることを願い、昭和38年に制定され、毎日の生活の中で心のよりどころとなるよう、市民の総意でつくられたものとなっています。

札幌市自治基本条例の前文でも、市民憲章を札幌の心としながら、先人の築いたまちをさらによいまちにして未来の世代に継承していく責任があると位置づけており、検討の参考に掲載をしております。

次に、参考資料2をご覧ください。

こちらは、前回の審議会で、平本会長から、SWOT分析について、札幌市のまちの強み、弱み等の定義が一部曖昧とのご意見をいただいたことを受けまして、強み、弱み等の定義を明確にし、再整理したものとなっています。

また、それを基に実際にSWOT分析をしたものが参考資料3-1になりまして、前回の審議会でのご意見を踏まえて、さらに更新した内容となっています。そして、ここで整理した内容が先ほど資料4でお示しした基本目標の内容を導く考察となっています。

参考資料3-2の2枚物については、基本目標ごとに具体的に掛け合わせた強み、弱み等の内容を示しております。

最後に、参考資料4をご覧ください。

こちらは、前回の審議会での委員の皆様からのご意見について、どのように検討内容に反映したかをお示ししております。

○平本会長 それでは、早速ではありますが、ただいまご説明いただいた内容について出席の委員の皆様全員からご意見をいただければと思います。会議時間に限りがございますので、今回もお1人3分以内でご発言をお願いいたします。

なお、今回は、議論を円滑に進めるため、一部の委員の方々より事前にご意見をいただいております。机上に別紙資料として配付されておりますので、そちらもご覧いただきたいと思っております。

また、本日、ご意見をいただくに当たりましては、既にご提出いただいたご意見に追加する、または、その内容を補足する、ないしは、別のご意見をいただいても構いませんし、ほかの委員の皆様のご発言を受けてでも構いません。

それでは、今日は、前回と逆にしまして、名簿の逆順でご意見をいただきたいと思います。

オンラインでご参加の吉岡委員よりご意見をお願いいたします。

○吉岡委員 まず、資料3の都市像（案）の第3章の都市像の文章についてです。

人口減少社会への対応は確かに必要だと思いますが、ややそれに対応し過ぎて後ろ向きに見えてしまうかなという印象を私は受けております。都市像を導く考えをここに掲載するのであれば、もう少し明るい未来をイメージできるような内容のほうがよろしいのではないかと思います。

例えば、今は、コロナのこともあって、物質的な豊かさを問い直して、本当の意味で豊かな暮らしを創造しようというように考え方に変化が起きていると思うので、そういったことも少し含めながら、例えば、北欧の地域みたく、夕方に仕事を終え、札幌の豊かな自然に触れて、家族や友人と過ごすまちなど、そういうイメージが醸し出されるような都市像を文章で示してもよろしいのではないかと考えています。

また、都市像として、「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」と「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」の二つがありますが、「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」について少し意見を述べたいと思います。

まず、「共生のまち」という言い方は前回のビジョンを踏襲していてよろしいかと思えます。ただ一方で、札幌市民の傾向として、自分が主役として声を上げていきながらまちをつくっていくのだという意識が必ずしも強いとは捉えておりませんので、そういう意味では、例えば、「共生のまち」のところに「市民自治のまち」という言葉を入れるなど、あえてそこに踏み込んだものを入れてもいいのかなと感じております。

また、札幌市には自治基本条例などもあり、市民が自分でまちをつくっていくのだというに関して積極的に進めていこうというベースもありますので、そういう言葉があってもいいのかなということです。

ただ、自治基本条例などは、ポイントが情報共有と市民参加という言葉で表現されているのですが、私は市民参加という言葉に少し疑問を感じております。何か、もともとあるものに参加して加わるというイメージを持ってしまうのではないかと考えていて、もっと主体的な言葉のほうがよりよいのではないかと考えているところです。

さらに、市民自治や住民自治などの言葉の中にぜひ子どもを位置づけてほしいなと考えております。札幌市には子どもの権利条例もございますので、当然ではあります、市民の中には子どもも入っているのだというところを表現できたらいいのではないかと考えております。

次に、基本目標についてです。

私は、子育て支援などが専門ですので、資料4の8項目の中の子ども・若者と地域の二つに限って意見を述べさせていただきます。

まず、子ども・若者についてです。

基本目標が1から3までありまして、基本目標1は、安心して子どもを生み育てることができる、子育てに優しいまちとなっていますが、これは子育てする親をイメージして位置づけているのだらうと思います。言葉としては特に問題ないのですが、先ほども少しお話したように、安心してという言葉は受身で、自分たちがつくっていくというようには

受け取れないのではないかなと思いますので、例えば、助け合いながらなど、自分たちが主役だという言葉に置き換えてもいいのではないかと考えております。

二つ目は、基本目標3についてです。

ここは子どもの育ちについて触れているところですが、左側の黒色の丸のところに質の高い教育を受けているという言葉があるので、ぜひとも基本目標3に教育という言葉を入れてほしいと思っています。例えば、全ての子どもが質の高い教育を受け、互いを尊重しながら学び合うまちなどとして、全ての子どもが質の高い教育を受けるのだということをしかりと示してほしいなと思います。そして、基本目標3には、健やかに育つという言葉もありますが、基本目標2にも同様の言葉があるので、繰り返さなくてもいいのかなという印象もありました。

最後に、地域についてです。

基本目標7の誰もがまちづくり活動に参加できるまちというのは、先ほども指摘しましたように、参加という言葉がここにふさわしいのかどうかは疑問に思っています。この言葉ではなく、例えば、市民自治による地域をつくるまち、市民自治により地域コミュニティーを育むまちなど、市民が主体なのだというような言葉で表現したほうがよいのではないかと考えております。

○平本会長 特に、主体的な表現がいいのではないかとするのはとても重要なご指摘ではないかと思えます。

続きまして、山本強委員、お願いいたします。

○山本（強）委員 私からは、先に送りましたコメントにあるとおりですが、簡単に補足させていただきます。

私は、都市像に対して宿題をいただきましたので、自分なりに考えて、日本の未来を牽引する北の拠点都市としてみました。

まず、なぜ日本の未来としたかということ、原案の中に北海道の未来と書いてあるのですね。私は、札幌という都市の位置づけを考えたときに、やはり、日本全体、あるいは、アジアレベルで役割を持つという認識を持つべきだと思っていますので、そういう意味でこれをつくってみたということです。

ただ、後から見たのですが、過去の計画の中には、北方圏の拠点都市という言葉がずっと出ているのです。私はそれをあまり認識しないで考えていたのですね。札幌市の場合には、どうしても拠点都市ということが出てくるだろうと思います。地政学的な位置づけにしても北のゲートウェイですし、日本の中の経済規模でいっても非常に大きいわけです。

ところが、今までの長期計画の拠点都市の位置づけを見ていると、北にあるから、北方圏など、場所的なことしか書かれていなくて、俺たちは北方圏にいるのだからということなのですよ。

私としては、今、日本の社会は、S o c i e t y 5 . 0と言われる次の時代に入ろうとしているわけなので、そのときの拠点都市というのは一体何なのかをぜひ考えてほしいと

ということです。つまり、何の拠点なのかなのですよ。私は、どちらかという、ビジネスや産業のほうに近いので、当然、ビジネスの拠点や情報ネットワークの拠点というように能動的に考えるのですが、これは皆さんのそれぞれのお立場でいろんな見方があると思います。でも、その拠点の果たす役割を考えていただきたいのです。それを考えていくと、拠点とは何なのだろうかという素朴な疑問に行き着くのです。

これは私の見方ですが、拠点というのは自分が拠点だと言い張っても駄目で、交通の拠点がそこを通らないとほかにいけないということと同じように、ほかの地域や機能から見てあなたがいなければ俺たちは成り立たないという認識を持たれることだと思うのですね。つまり、ただ北にあるから拠点だということではなく、ビジネスの拠点なのか、情報ネットワークの拠点なのか、あるいは、日本の新しいビジネスをつくり出すインキュベーションの拠点なのか、スタートアップの拠点なのか、そういう認識を持って進めていただきたいというのが私の言いたいことです。

もう一つ、今までは北方圏ということに随分こだわりがあったのですが、今、北海道や札幌が認識されているのは、むしろ、南半球やアジアの熱帯の地域なのです。今まで、私たちは北にいるのだから北の仲間だ、みたいな認識があったと思うのですが、やはり、多様性の時代ですから、相手方として、アジアや南半球、ヨーロッパなど、そういうところを視野に入れた都市像を描くべきだと思います。少し大きく出てもいいのではないかと思います。

私からはこのぐらいでまとめたいと思います。

○平本会長 最後に山本委員がおっしゃってくださった少し大きく出てもいいのではないかと思います。都市像ですから、ちんまりとまとまらず、大きくてもいいのではないかと思います。ご指摘はそのとおりだと思います。

続きまして、山本一枝委員、お願いいたします。

○山本（一）委員 私も、今、山本強委員がおっしゃった日本の未来を牽引するというお考えにはとても賛成です。北海道の中の、と見えなくてもいいかなというのということです。また、海外に行ってビジネスをする会社もだんだん増えてまいりましたし、私どもも海外との取引を模索しているところですので、日本の未来、または、世界の未来を引っ張っていくようなものが生まれてくることを想定した上で積極的に活動していく、と考えてほしいと思います。

私は、参考資料4にあるように、まちづくりの基本目標の中でも、子どもの幸せは未来そのものであり、すごく重要だと思っておりますので、子ども・若者の基本目標の1から3については非常にいいと感じております。

ただ、それを達成するため、また、若者が希望を持って暮らすまちになるため、親が豊かさを持って子どもを育てられるまちになるためにはどうしても経済が基本的なベースになりまして、やはり、車の両輪のように両方がうまく回っていかなければならないと考えているところです。

札幌は、明治時代から積極的にビジネスをやる方たちが集まってまいりましたし、それぞれの場面で非常に頑張っている企業がたくさん出てきて、世界的な企業も生まれております。今後ますます新しいものや高付加価値なものが求められてくる中で、つまり、子どもたちであり、若者である未来の経営者がきちっと商品を生み出し、それを産業としてちゃんと機能させなければいけません、やはり個人的に頑張りましたというのではなかなか進んではまいりません。ですから、札幌で今頑張っている企業はもちろん、スタートアップを支援するといった仕組み、それから、例えば、先輩から経営のノウハウを学ぶ、仕事の提供を受ける、投資を受けるなどということも必要だと思います。

それから、例えば、海外に商品を売ろうというときは、国によって商慣行が違うということを知る必要があります。また、契約書の交わし方にしても全く違うということをお聞きしておりますので、そういったことを具体的に学べる場をきちんとつくり、スタートアップ企業が世界的な企業に成長し、人材発展につながるような支援の場をつくれればと思います。

なぜならば、札幌の中には人材がたくさんいるからです。その方たちの力をスタートアップ企業のために使っていただければ、新しい企業がたくさんできて、多くの仕事ができ、雇用が生まれて、継続できるということで、発展していくと思います。

山本強委員がいらっしゃる中でお話しするのもあれですが、IT企業がたくさんできた頃は、出るくいを打つようなことは札幌ではございませんでした。みんなで一生懸命支援したり、若い人たちがとても元気のある時代を過ごしました。私もその中でいろいろな方たちとお会いし、話しましたが、そのときの雰囲気や空気感は非常に印象に残っております。

今後、子どもたちや若者に幸せなまちだと思ってもらうためには、個人で一生懸命頑張ってということではなく、例えば、新型コロナウイルスで厳しい状態になっている方たちに社会が手を差し伸べ、課題を解決するためのいろんな知恵を差し上げられるようなまちづくりをしていかななくてはならないと考えております。

○平本会長 特に、人材やスタートアップ企業というご発言については、ビジョン編だけでなく、戦略編にも関わるような具体性のあるものだと思います。

続きまして、山中委員、お願いいたします。

○山中委員 まず、都市像についてですが、持続可能性——サステナビリティという概念がかなり薄いように感じていて、まるでサバイバルのような読み方ができるのではないかと考えています。

サステナビリティというのはウェルネスやスマートという言葉とも関係すると思うのですが、SDGsが書かれている国連の議決は「我々の世界を変革する、Transforming Our World」と呼ばれる表題であり、生まれ変わるという決意みたいなものが一つ必要だろうと思います。

それから、ウェルビーイング経済(Well-being Economy)と呼ばれている概念がスコット

ランド、ニュージーランド、アイルランドから生まれつつあります。ニュージーランドでは、ウェルビーイングの予算を策定するときに、それぞれの施策がウェルビーイングに貢献するののかというプロセスを入れました。これは、今、それが世界的にも最先端な考え方になっています。つまり、世界が憧れるまちというのは持続可能なまちだということですね。

次に、まちづくりの基本目標の話に入ります。

前回も話しましたが、札幌市というのは、エネルギーや食料、人を外に依存しているわけです。これは、SWOT分析でいうThreat、明らかな脅威なのです。だから、その視点を入れる必要があるだろうと思うのです。でも、それは札幌だけで実現できるものではないから、札幌の都市像や基本目標にどう入れるかということになると、直接的に北海道をどうしますとは書けないにしても書き方はあるだろうと思っています。それは、例えば、「賢い消費者が住むまち」、「ワイズユーザー(wise user)が住むまち」なのであるということですね。そうすれば、札幌に住みたいといったとき、地球に優しく、日本に優しく、北海道に優しい住人になりたい、コスモポリタンとは言いませんけれども、そういう意味で、賢い消費者、ワイズユーザーという視点とが必要だろうということです。

実は、その芽はあって、ゼロカーボン都市がそうです。例えば、ブラックアウトですが、札幌市が幾らよいエネルギー消費していたって起こってしまったわけです。そういうリスクという視点は賢い消費者が選択していくことなのです。このことは札幌市民ができることですし、その推進を札幌市はできると思います。

また、フェアトレードタウンも同じです。フェアトレードタウンも地元の産品を買ったり、世界のものを買ったりするわけです。これは実際に札幌市の施策としてやろうとしている、例えば、木造の家を建てる時は道産木材を使おう、それを使うときには補助をしましょうみたいなことに当てはまります。これは、単なる個別の選択というより、まちづくりの基本目標として、賢いユーザーをつくるのだということです。世界的な視点から見ると、メガシティというものの欠点を補うようなものになるわけです。

基本目標の中では「世界に冠たる環境都市」と言っているのですが、環境というのは、SDGsの観点から考え、環境、経済、社会が不可欠な関係であるとするならば、目標16について、名前を変えていいならば、「世界に冠たるサステナブル都市」にしてもいいかもしれません。英語で考えてみると、そのほうがぴんとくるわけです。Sustainable Cityなら分かるけれども、Environmental Cityとは何だということになるので、そういう意味では、我々はサステナブル都市になるのだという目標を立てたほうがいいように思いました。

○平本会長 都市像と基本目標の両方に関わって、サステイナビリティという概念をもう少し明確に打ち出すほうがよからうというご指摘かと思います。

続きまして、松田委員、お願いいたします。

○松田委員 吉岡委員もおっしゃっておられましたが、ふだん、子ども・若者・子育て支

援の仕事をしている立場から、基本目標と都市像にあるユニバーサル（共生）に特化して申し上げたいと思います。

支える人と支えられる人という一方向の関係性がいろいろなところで強調されていたように見えたが、私は、ある局面において、支える側になったり、支えられる側になったりという役割はあっていいし、あると思っております。

ただ、常に支えられる人になっているといいますか、その循環の回路があまり機能せず、固定化していることに問題を感じております。支えられていた子どもたちや若者たちが支える側に回っていく、それは時間軸を見てもそうかもしれませんし、ある場面においてその役割のシャッフルが起こるといことも考えられます。つまり、都市像の「心豊かにつながる」というところもありますが、心の問題ではなく、仕組みや仕掛けの不足なのではないかなと思います。

実際に子どもや若者の居場所を運営していても、私でよかったら子育てをお手伝いしたいとずっと思っていたという方がかなり来られますし、そういう仕組み、仕掛け、あるいは、体験機会さえあれば、札幌の市民力みたいなものが花開き、力になってくれると思いますので、機会をつくる、場をつくるという視点については、心の問題ではなく、仕組みの問題として捉えていきたいなと感じております。

○平本会長 精神論ではなくて、仕組みをきちんとつくるのが基本目標などに掲げられるといいのではないかとご指摘かと思っております。

続きまして、牧野委員、お願いいたします。

○牧野委員 私は、事前にたくさん書いて出しましたので、補足のような形でお話しさせていただきます。

私の立場としては、都市像や基本目標については、多様な人が当たり前のように自然に交じり合って生活していける環境が重要ではないかなと思っています。

また、都市像の丸で囲っているところに赤色の字で「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」という言葉がありまして、これは心のバリアフリーが裏に隠れているのではないかなと感じます。そして、資料4には、ユニバーサル、ウェルネス、スマートという三つの基本目標が出ておりますが、ユニバーサル（共生）の中にぜひ心のバリアフリーという言葉を入れていただきたいなと思っています。

なぜかという、心のバリアフリーというのは、この八つの項目の全てに関わる言葉だと思うのです。例えば、生活・暮らしに建物のバリアフリーとありますが、これは、建物のバリアフリーだけではなく、心のバリアフリーも伴わないと完全ではないと思います。地域のところにも、障がいの有無、文化、民族、国籍に対する心のバリアフリーという言葉が入っていますが、ここだけではなく、全部に関係あることではないのかなと思うのですね。

このように目標に掲げたり言葉で言うのは簡単ですが、現状はまだまだ遠いように感じています。関わることや接することが少ないため、どう対応していいか分からずに線を引き

いてしまったり、特別なものと考えてしまいがちな場面によく出くわしますので、その意味においては、車椅子の私がこの審議会に参加させていただいているだけでも意義があるのかなと思いますし、できるだけ皆さんに理解してもらえるように発信していきたいと思っています。

それから、高齢者についてですが、皆さんもご高齢になったら障がいと関わりが出てくるのではないかと思います。高齢者というと医療や介護というイメージにつながりがちですが、元気でまだまだ活躍できる生産性を持ったすばらしい方がたくさんいらっしゃるのので、生涯現役でそれを生かせる場所も必要です。

それから、経済のところに誰もがチャレンジできるまちと出ています。私自身もピンチをチャンスに変えることができたからこそ思うのですが、多様な人へのチャンスの種をたくさんまき続けていける札幌を望みます。アフターコロナが変革のときと捉えますので、SDGsも含め、まずは知ること、関わっていただくことで意識が変わることを提案したいと思います。

○平本会長 心のバリアフリーというキーワードについて、本当はユニバーサルとウェルネスにということでしたが、どこかに入れられればいいのかないかなと思いました。

続きまして、オンラインでご参加の原田委員、お願いいたします。

○原田委員 SWOT分析を拝見しましたが、もう一歩踏み込んでほしいなと思うので、ぜひ、クロスSWOT分析までたどり着いて、戦略的なものにしてほしいなと思いました。

例えば、弱みを出すだけではなく、弱みと機会をクロスし、弱みを克服することで機会を得る戦略立てが可能になると思います。例えば、6メートルの雪というのは、機会ではなく、ひょっとしたらウイークポイントかもしれないですね。通年を通じたまちづくりには障害になる可能性があります。あるいは、弱み掛ける脅威です。弱みや脅威から来るマイナスの影響を最小限に抑えていくということです。非常に難しいまちづくりにはなると思うのですが、SWOT分析を一歩進めたクロスSWOT分析によって戦略に落としつけてほしいなということです。

次に、2点目ですが、札幌の戦略としては、アウターの戦略とインナーの戦略があると思います。インナーに関しては、まちづくりをもう一歩進めていくための具体的な戦略が少し見えてきていない気がします。皆さんは、それぞれのお立場からいろいろなことをおっしゃっていますが、では、どういうまちをつくるのだという全体像ですね。

一つ参考になるのは、名古屋市です。名古屋市は、2026年のアジア大会の開催を契機に、今、まちづくりに非常に邁進しています。例えば、テレビ塔がある久屋大通は、札幌市の大通とよく似ていますが、あそこをPark-PFIでがらっと変えましたね。これまでは木が鬱蒼と茂っていたのですが、今は、ブティックが並び、すごいおしゃれな場所になりました。テレビ塔の中は、高級ホテルで宿泊が可能になったというように、まちのシンボル化に成功していますので、そういった都市公園を公民連携の仕組みを使いな

がら変えていく手だてが重要になるのかなと思います。

また、アウターの政策とすれば、私は、観光産業に思い切って振り切るぐらいの流れが必要かなと思います。やはり、世界から人を呼んで、お金を落としてもらうというのが、今の北海道、札幌に残された唯一の発展の道かなと思います。

スポーツという立場からも、2030年の冬のオリンピックの実現に向け、選手と一丸になってサポート体制を築いていただきたいなと思います。今、オリンピックのことをしゃべるのはタブーで、いろいろと問題も多くて言えませんけれども、こういうものは風向きです。風向きによってがらっと変わる可能性があります。例えば、2022年2月に北京で冬のオリンピックがありますので、それを追い風にするということもあるかと思えます。すなわち、中国人の冬のオリンピックに対する熱狂度がマックスになりますので、では、次はどこだという話になると思います。

そういうことで、近い将来のインバウンドの回復を願いつつ、アウターの政策と先ほど言ったインナーの政策をうまく掛け合わせながら、まちづくりをさらに一歩進めていただきたいなと思います。

○平本会長 前段のクロスSWOTについては、参考資料3-1と参考資料3-2を見ますと事務局にやっていたようにですが、さらに踏み込んでもう少しということですね。例えば、弱みと脅威、あるいは、機会はあるけれども、弱みになっているところも戦略を立てる上でお考えいただいたらいいのではないかというご指摘でした。

また、クロスSWOTをさらに一歩進めて、ダイナミックSWOT、時系列で考えることも必要だということも含めてのご指摘かと思えます。

それから、後半のアウターとインナーの話は、特に名古屋などが例になるのではないか、それから、戦略なので、やはり少しウエートを置いて、例えば、観光に振り切るというようなことも札幌市の戦略ビジョンを考える上では一つの方向ではないかということでした。

続きまして、中田委員、お願いいたします。

○中田委員 私からは、事前に意見書を提出しておりますので、それをベースにお話しさせていただきます。

まちづくりの基本目標の経済のカテゴリーになろうかなと思いますが、若者の道外流出についてです。

経済の活性化という観点でいえば、若者というのは大きな人的資源です。この人的資源である若者の道外流出には、やはり、道内の産業基盤の弱さが起因しているのではないかなと思いますし、そういった認識は共通している部分があるのかなと思っております。

前回の審議会では、私から、札幌市は、製造業が少なく、サービス産業が多い、賃金の面では、サービス産業の賃金体系が低いため、この賃金体系を上げていく必要があるのではないかというお話をさせていただきました。

ビジョンの計画期間内においては、今後、新幹線の札幌延伸が実現する、あるいは、空港、高速道路網と併せて、札幌と道内の各市町村、道外も含めて、人流あるいは物流が格

段に飛躍されることが期待されますし、そういった期待感が国内外の企業にアピールできる材料になるのかなと考えております。

ビジョンの中には、今までも若者の流出についての記載がたしかありましたけれども、例えば、先端技術産業の製造部分の誘致を目指す、あるいは、札幌の主要業を生かした産業を、受皿を通して、積極的に起こしていくというような具体的な対策が見えていなかったのではないかなと考えています。より強力な対策について、ビジョンですので、どの程度それが可能かは分かりませんが、可能な限り具体的に記載したほうがより明確になるのではないかなと考えております。

次に、スタートアップの支援についてです。

札幌市は、スタートアップ、エコシステムの拠点として国から認定を受けているということもありまして、この分野に関しては、協議会ができたり、いろいろな分野において積極的に取り組まれているなという印象を受けております。そういったことから、このスタートアップへの支援については行政からもしっかりとサポートしていかなければいけないと思っておりますし、そうすることで若者の流出を防ぐことや新しい産業を創造する、あるいは、起業を目指して札幌に移り住むことにつながってくるのかなと考えておりますので、そういった支援が必要かなと思っております。

それに加えて、若い人が起業を目指すというような土壌づくりも必要かなと思いますので、学校教育や様々な教育を通じて起業家精神を育む機会を増やしていくことが大事ではないかなと感じます。

次に、スポーツ・文化の 카테고리になると思うのですが、スポーツイベントの誘致についてです。

1972年に冬季オリンピックが札幌で開催されて以降、札幌では数々の冬季イベントを開催し、国内外でもウインタースポーツシティだと認識されております。ですから、基本目標13の世界屈指のウインタースポーツシティの部分をもさらに推進していくことに対して異論はございませんし、必要なことだと思っております。

一方で、夏季のスポーツイベントについてです。今まではサッカーやラグビーなどのワールドカップの予選が行われて知名度もかなり上がってきている状態であり、今年の東京オリンピックにおいても、競歩、マラソン、女子サッカーの予選が札幌で行われる予定になっております。

札幌は、四季がはっきりしていることと夏が冷涼であるという強みもありますので、温暖化が進むに従って、札幌の気候というのは、ウインタースポーツに限らず、夏季のスポーツイベントを開催するにも適していると考えております。しかし、施設等の整備について課題は生じることがあると思うのですけれども、長期的な視点で取り組むことに価値があると思っております。

また、コロナ禍で観光産業は大打撃を受けておりますが、新たな需要喚起をするために札幌のスポーツ面でのイメージを上げることが必要だと思っておりますし、それが新た

なる企業誘致につながる可能性もあるのではないかと考えております。

○平本会長 若者の道外流出とアントレプレナーシップの件、それから、スポーツイベント誘致における札幌という土地の優位性などについてのご発言だったかと思えます。具体的に記載したほうが良いというご意見はそのとおりで、戦略編では具体的な記述を心がけることが重要ではないかと思えます。

続きまして、高橋委員、お願いいたします。

○高橋委員 このビジョンの中心となるメッセージは都市像に端的に示されることになるかと認識しておりますし、都市像は市民や世界とのコミュニケーションのためのコアになるものと考えております。ですから、都市像にはビジョンの個性を明確に描くことが必要であると思えますし、個性ある都市像は、個人的には、SAPPOROのロゴのように、多くの人々の頭の中にイメージとして浮かんでくるものであり、心に刻まれるものであってほしいと思えます。

私は、その都市像を札幌の強みの一つである豊かな自然環境とそれを守る都市としての姿勢と考えました。具体的なキャッチフレーズをここにお示しすることはできませんが、札幌の地理的特徴を生かした様々な取組実績、築かれてきたみどり豊かなまちの姿、ほかに、委員の皆様が指摘する強みなどを踏まえた札幌だからこそ提示できる姿を表現することです。これは、椎野委員と山中委員の事前意見にも重なっていると思えます。

そして、私たちが地球の一員として人類であることを考えると、人間が自然とともにあるということ、多様な人々とともに生きるということが守られる、また、実行されている都市であることを表現することができればと考えています。

それは、脱炭素社会のモデルとなるような都市であり、みどりに囲まれた空間で多様な人々とともに学び暮らせる場所であり、一人一人のウェルネスが実現されている愛すべき場所であるということです。そして、そのようなモデル都市・札幌に世界から学びに来るような場所でもあってほしいと思えます。

ほかに、事前のご意見にありましたように、企業の誘致やスポーツイベントの開催、スタートアップの発展など、様々な活動を自然の中で暮らすまちという大きな物語の中で進めてはいかがでしょうか。

また、経済活動や人口という点では、首都圏と比べると弱みと考えられる部分は多いかもしれませんが、豊かでかけがえのない自然という財産を持っているという点では、札幌は大変幸運な強みを持っております。その強みは、今後、数十年、100年といったスパンで非常に重要な意味を持つてくることになると思われます。自然という札幌の重要な資本を守り、物理的にも精神的にも総合的な意味で環境を第一に置くような都市をつくる、そのような都市像を目指してはいかがでしょうか。

○平本会長 都市像というのはビジョンの中核になる部分であり、個性的なものであることが重要なのではないかと、そのときに札幌の強みを入れていくことが大切だということかなと理解しました。

続きまして、高野委員、お願いいたします。

○高野委員 私は、事前に意見を出させていただいております。資料5の中と書いていますけれども、資料4の基本目標ですね。

ユニバーサルというのは、私としては、ユニバーサルデザインというように、普遍的なとか、あまねく広くというような意味合いで使っております。先ほど牧野委員からもお話がありましたが、この基本目標の中には、誰一人、誰もがというように、人への普遍性ということは書いてありますが、私としては、時と申しますか、夏、冬、365日、24時間といったユニバーサル性も重要ではないかと思っております。

例えば、札幌では、路面での転倒で年間1,000件以上の救急車搬送がありますし、高齢者にとっては雪かきが大変大きな重荷になっているということで、郊外部から都心部の集合住宅に移りたいというニーズも結構多いと思います。

それから、坂がそんなに多くないので、夏場は自転車等で快適に移動できていますが、冬になると自転車が使えなくなりますし、自動車交通も途端に大渋滞が発生します。

そういう意味では、夏と冬に全く同じサービスを提供することはどだい無理ではありますが、冬だからそういったサービスを諦めなくてはいけないということではなく、冬でも夏に近づけるようないろいろな努力や取組、工夫をすることによって時のユニバーサル性を今以上に高めていくことが必要なのではないかと感じています。また、夜間の安全というようなことがありまして、そういったことについてもやはり考えなくてはいけないと思います。

先ほどからもご意見が出ておりますが、例えば、2030年に冬季オリパラを開催することになりますと、前回はパラリンピックが開催されておられませんので、札幌では初めてのパラリンピックということになるわけです。そうすると、まさに冬季のバリアフリーが必要とされるわけですので、そういう意味においても、ぜひとも、時のバリアフリー、あるいは、ユニバーサル性について何らかの形でここに書き込んでいただきたいなと思っております。

○平本会長 私は、高野委員の事前意見を拝見して、不勉強ながら時のユニバーサル性という考え方があることを知らなかったのですが、今、改めてお話を伺い、特に冬になると随分差がある札幌だからこそ、そこを強調することに意義があるのだというご指摘だと理解しました。

続きまして、尚和委員、お願いいたします。

○尚和委員 今回の都市像や基本目標に、共生の概念として、支える側と支えられる側に二分せず、誰もが多様性を尊重して支え合うという考えですとか、健康の概念として、誰もが幸せを感じ、生涯現役として活躍できるという考え方が反映されていることはとてもよいと思いました。

昨年からのコロナの流行によって、人と人とのつながり意識の低下や孤立による健康への影響などが懸念されておりますし、デジタル技術の急激な進歩に高齢者や障がい者など

が取り残されないように配慮しなければならないということもありますので、共生や健康の概念というのはより一層重視したい点ではないかと思えます。

一方で、都市像について、札幌市の持つ魅力はというところに北海道の自然に支えられたとありますが、自然に頼るだけではなく、市民が力強く地域を支えている事例はたくさんありますので、人の力が魅力になるようなことや市民がこれからみんなで力を発揮しようと思えるような内容が盛り込まれるとさらによろしいのかなと思えました。

また、誰もが生涯にわたって人とつながりながら健康を守り、社会で活躍できるようにするためには、子どもの頃から健康づくりやまちづくりに触れることや高齢になっても学び直すことができるという点がとても重要だと思えますので、それが基本目標に盛り込まれてよかったなと感じています。

さらに、基本目標において、子ども・若者、生活・暮らし、安全・安心など、分野を分けてくださっているのですが、それぞれが密接に関係していると思えますので、実際には、複合的、総合的に取り組んで、それが評価・分析されていくことが大切ではないかと思っています。例えば、人とのつながりや地域意識があることと健康というのは密接に関係していると言われてしますので、健康づくりの取組を通して町内会を活性化するなど、既に行われている試みは多々あると思えますが、そういった取組はまだ限定的だと思えますし、全体に広がるようになるといいのではないかと思います。

最後に、高齢者の健康づくりの面で、住民が主体的に行っている健康づくりの場はたくさんありまして、行政としても介護予防事業などを行っているのですが、住民の主体的な活動の場というのは健康寿命の延伸に向けての貴重な社会資源だと思えますので、そういった情報が多くの市民で共有できるよう、市民だけで頑張るのではなく、団体、行政、医療・福祉機関とうまく連携がなされて、多くの人にそういったサービスが届いていくといいなと思っております。それを基本目標に入れることが難しければ、今後の具体的な取組の部分に記載されていくとよろしいのかなと思えます。

○平本会長 ユニバーサル、ウェルネスに含まれているという考え方についてはいいのではなかろうか、都市像についても人の力が強調されていていいのではないかということでした。一方で、取組は行われているけれども、まだ十分に行き渡っていないものをどこかに書き込んでもいいのではないかというご意見だったかと思えます。

続きまして、柴田委員、お願いいたします。

○柴田委員 皆さんのお話を聞きながら、「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」、「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」の「共生」や「世界が憧れる」というのはどこのことを言っているのか、あるいは、あるべきなのかをぼんやり考えていました。

それは私の仕事にもすごくつながっているのですが、私はアーティスト・イン・レジデンスという特殊な仕事をしています。世界中からアーティストを札幌に滞在させ、その間に新しい作品をつくらせるという活動で、22年間、37か国で103名招聘してきました。

た。アパートをつくるどころから始め、帰すまで、全部の費用を持ち、そのお金づくりも自分たちで行ってきたのですね。この事業は共生にもつながるのですが、彼らが心豊かになった瞬間はどんなときかなとぼんやり考えてみました。

その土地の特徴というものは、相対的なものでもありますね。作家たちと接するとき、僕らは、芸術文化ということよりも、生活のほうに重点を置き、活動がどう変わるかということを経験したのですけれども、連れてきて一番受けがいいのは温泉ですね。最初、専門であるギャラリーや美術館には連れていきません。なぜかという、国際的には、必ずしも受けがよくないからです。

例えば、市の芸術文化予算のパーセンテージについては、札幌市は言えないと思いますが、多分、0.5%もないでしょう。例えば、これがフランスのナント市など最大14%もある。いわゆるアート先進国都市の人々には、札幌のアートシーンは魅力的に映らないのです。じゃ、札幌にあるものは他に何か・・・と考えるのですね。

一度、滞在しているマレーシアの作家に、「日本の文化はあまり面白くないでしょう」と聞いたことがあるのですが、「いや、私はとても幸せだ」と言うのです。「朝、目覚めた瞬間から幸せだ、自由に表現できるから」と言うのですよ。アジアの作家にはそれがとても多いのですね。というのも、アジアの中でこんなに自由に表現できる国はそんなに多くないということです。これは札幌だけではありませんが、札幌はご飯がおいしい、気候がいいということと掛け合うと、それがここにしかない魅力になっていくのです。

僕は、昔、ギャラリストをしていて、東京やニューヨークのように作品を売ろうとしていたのですね。でも、難しかったですね。そこで考え方を転換して環境を売る、要するに、豊かな生活環境を生かして、新たな価値観を創造するというビジョンに変えたのです。

また、「北海道の未来を創造」と書いていますが、新しい価値はどうやってつくるのかを考えてみます。芸術文化の予算は少ないですが、日本全体としてはお金を持っています。それは、皆さんが関わっているような分野に分かれているわけですね。そこを掛け算して、そこで新しいものを生み出していったらどうかと思うのです。

たまたま今、ベトナムにいる日本人作家とやり取りしていたのですが、ベトナムから見て日本に何があったらいいか、札幌に何があったらいいかと聞いてみたら、「ベトナム人は介護の仕事でいっぱい日本に行っているんで、介護とアートはどうか」と言うのですね。こういうことは札幌だけではないかもしれませんが、札幌が先に積極的にやると新しい地域資源になっていくこともあります。地域資源というのは、もともとあるものだけではなく、新しくつくるものもそうなりえるのです。これは、芸術文化だけではなく、いろいろなジャンルの中で起こり得るのではないかなということを感じました。

○平本会長 前半のアーティスト・イン・レジデンスの話も大変面白かったのですが、特に、新しい地域資源というのは自ら分野を決めてつくっていかねばいけないのだという最後のご指摘はとても重要なのかなと思いました。

続きまして、椎野委員、お願いいたします。

○椎野委員 事前意見を提出させていただきましたが、もう少しかみ砕いてご説明させていただきます。

環境分野になると思うのですが、基本目標として、「身近なみどりを守り、育て、自然と共に暮らすまち」をご提案させていただきました。どちらかという、市民に近い目線での提案だと自分では考えております。

みどりという言葉は、非常に幅が広く、個人のお宅の庭からまちの中にある街路樹や都市公園みたいなものもありますし、もっと大きくいうと、札幌市では環状グリーンベルト構想という市街地を取り囲むみどりの創出や保全という施策を進めておりますが、そういう大きいスケールのものも含め、みどりという表現を使わせていただいております。

また、みどりには、存在機能と利用機能の二つがございます。存在機能は、要するに、災害時の火災延焼防止、防災機能や、そこにあることによってヒートアイランド現象を緩和するものです。一方で、利用機能は、子どもの身近な遊び場ということもあれば、市民が週末にレクリエーションを楽しめる場など、利用することによって健康増進を図るものです。

六つほど書かせていただいておりますが、大きく分けると、1と2は、自然環境と触れ合う機会を創出していくべきではないかという提案です。

一つ目は、市民が自然の中に入って自然の豊かさを享受すること、二つ目は、未来の都市を担う子どもに早いうちから自然に親しんでもらい、自然の面白さを、体験を通じて学ぶことによって自然を大切にする気持ちを養成することです。札幌市内ではいろいろな地域の方がそういった活動をやっておられるので、それを改めて見直し、機会を創出していくべきではないかということです。

次に、3と4に関しては、皆さんからも出ていたように、健康増進に関するもの、特に高齢社会におけるみどりの在り方みたいなものです。

三つ目としては、健康寿命の延伸におけるみどりの役割について書かせていただきました。これまでに行われた研究で、規模の大きい都市公園がある地域にお住まいの方は、そうでない地域の方に比べ、運動習慣を1.2倍お持ちでいらっしゃるという成果があります。つまり、自分が外に行って活動したいという環境条件として活動できる場があることが非常に重要だということです。

札幌市には、皆さんのお住まいの地域にもあるかもしれませんが、まちの中でも非常に規模の大きい都市公園があるので、その場所をもっと活動したくなるような空間に整えることが重要ななと思っています。

それから、札幌の場合は、各区でウォーキングマップを製作し、ホームページ上でも公開しているのですが、もしかしたらあまり知らない方が多いのではないかなと感じています。そういう既にある資源をもっと広く広報していくことによって外出機会の創出につながりますし、特に高齢の方が、身近な場所に出かけてみようかということで、運動する習慣や外に出る機会をつくるきっかけになるのではないかなとも思っております。

四つ目は、同じような視点ですけれども、札幌や北海道の場合は、移動手段としてマイカーを使う機会が非常に多いと思うのです。でも、マイカーの運転をやめてしまうと、移動範囲がすごく狭くなってしまって、どうしても閉じ籠もりがちになったり、外出機会がなくなったりすることがあるのではないかと思います。

札幌の中でも特に古い時代に開発された場所では、お住まいの方がもういらっしゃらず、空地や未利用地が増えてくることは避けられない状況かと思っています。それは都市の課題でもあります。それを一つの資源として位置づけて、例えば、地域の方がそこで花壇をつくったり菜園をやったり、もちろん、地権者の方との調整が必要とはなりますが、そういう場として使い直すことも外出の機会になるのではないかと感じています。草花や野菜を育てたり、収穫を一緒に楽しんだりというのは地域の方のつながりの再構築にもつながっていきますので、身近な空地を資源として見直すことも大事ではないかと思っています。

五つ目と六つ目は、防災・減災の観点についてです。

今月3日に熱海で土石流災害があったことは皆さんも記憶に新しいところかと思っています。被害者だけでなく、後背のみどりもきちんと保全していくことが非常に大事だと思っています。そこに開発行為で残土を載せてしまったり、盛土をしてしまったりしたことで災害のリスクが高まるということもあるかなと思います。ですから、まちなかもそうですけれども、後背のみどりの自然を改めて保全していくことが防災・減災につながるということを改めて認識する必要があるのかなと思っています。

最後ですが、防災や減災において、まちなかのみどりも非常に重要な機能があると思っています。災害時の支援をする場の拠点として使われたり、あるいは、仮設住宅の候補地になったり、空間としての使い方みたいなものもあると思うのです。

それから、2018年の胆振東部地震のときには、ブラックアウトにより一部のマンションで断水が起き、生活用水に困った方が少なからずいらっしゃいました。ただ、そのときに身近な公園で水が出て、それが生活用水として利用されたということがあったのです。これは身近なみどりを防災機能として改めて見直す機会になったのではないかと考えておりますので、防災・減災という観点から、改めてみどりを見直すことも大事かなと思っています。

みどり分野に限らず、いろいろな分野に関係してくることかと思うのですが、以上を総括して、「身近なみどりを守り、育て、自然と共に暮らすまち」を私から提案させていただいたということです。

○平本会長 基本目標として「身近なみどりを守り、育て、自然と共に暮らすまち」をご提案いただき、それについての三つの背景のご説明がありました。

基本目標17に豊かなみどりという言葉で書かれているのですけれども、環境だけにとどまらず、暮らし、あるいは、健康にも関わるというご提案であったと思います。

続きまして、佐藤理良委員、お願いいたします。

○佐藤（理）委員 私からは、生活・暮らし、地域に関することについてお伝えさせてい

たきます。

札幌市の特徴としては、北海道の最大都市として、道内外から様々な方たちが来て、市民となって暮らしていらっしゃる。つまり、多種多様な考え方の方たちがいらっしゃる、それから、様々な状況で生活している方たちがいらっしゃるということです。一つの方法だけのコミュニティーづくりや社会づくりでは一握りしかすくっていけないということになりますので、様々な形や方法でコミュニティーに参加することで札幌市の地域づくりを進めていただければと思っています。

今回の都市像や基本目標には、互いにとか誰もがというような対象を広く捉える言葉が多々使われているだけで、多種多様な方の参加が必要なのだということを強く出していく整理になっているのかなと思いました。

また、前回の計画の中では、最初のほうに地域課題を解決できるという文言が入っているのですが、地域課題を解決するよりも地域課題を把握することのほうが非常に重要なのかなと思います。やはり、何が問題なのかを自分たちで考えていかないといけないと思いますし、人から与えられたものだと、誰かがやってくれるからいいかと本当に人ごとになってしまうかと感じます。ですから、自分たちで地域課題を考えるとといった文言や考え方については、目標として掲げられなくても、考え方を整理していく段階で入れていただくとありがたいなと思います。

それから、災害のことですけれども、数年前のブラックアウトのとき、私どもも地域に住まわれている方たちを支えている身として活動をしようとしたのですが、皆さんの安否確認をする過程で非常に苦労しました。連絡先は分かっているけれども、電話が通じず確認が取れませんでした。電話が基本になっていたので、安否確認に時間を要してしまったのです。

災害が起きたとき、災害を防ぐ、被災した場所を回復していくことも重要だと思いますが、災害が起きた直後の状況把握を速やかに行うための環境づくりが大切ではないかと思っています。

テレビを見ていると、けがをした人が何人、行方不明の方が何人というニュースがよく流れますが、札幌の場合はそれがどれだけできるのだろう、どれだけの人たちの把握方法があるのかなと不安に思うことがあります。その辺の整理もしていけるような計画づくりをして頂きたいと思っています。

○平本会長 多様な考え方や人々が参加できる、誰もがということで書かれているところは評価していただけたということかと思っています。逆に、主体的に地域課題を考えるという積極的な文言をどこかに入れられないか、それから、災害についてももう少し言及してはどうかというご指摘だったかと思っています。

続きまして、佐藤大輔委員、お願いします。

○佐藤（大）委員 案として出している都市像はすてきな言葉だなと感じていますが、先ほどから何人かの委員の方がおっしゃっていたように、もっと積極的でもいい

かなというご指摘と同じことを感じています。例えば、「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」というのはすごくいいと思うのですが、札幌であることの特徴というか、特性というか、独自性みたいなことにもうちょっと突っ込んでもいいのかなという印象があります。

少し具体化していただいた基本目標のところでは、個人的にスマートというのはすごくいいと思うのですが、スマートとは、ここにも書かれているように、先端技術等を活用するという前提なので、知的な成果物を生み出す側に向かっていくという私たちの目標意識みたいなものがあった方がいいのではないかなと思いました。スマートは、どこの都市でも目指すところではありますが、むしろ、そういったものを生み出していくまちとしての強みとしたほうが夢もあるし、いいのかなと感じています。

同時に、スマートという言葉よりも、インテリジェンスとか、知性、知的というキーワードのほうがより突っ込んでいるかなと思います。そういったことを言う背景としては、例えば、ビジネスを生み出す仕組み、あるいは、企業も産業もそうだと思いますが、そういうものがあるところは若い人たちが集まる場になる傾向が高いと思うのです。

優秀な学生が東京の企業に行きたいと思う要因には、もちろん、収入がいいということもあると思いますが、ビジネスが魅力的で、そこにひかれていくということがすごく大きいと思うのです。そういった意味では、インテリジェンスを生み出す場、また、そうした産業がある地域であれば、その企業に就職したいという人たちが多くなり、結果として若い人が集まります。もっと言うと、札幌の場合は、集めるまでもなく、出ていかなければ若い人たちは十分にたくさんいらっしゃるわけですから、若い人たちが集う場所になれるのではないかなと思うのです。

しかも、今申し上げたように、アイデアがいわゆる新しいビジネスを生み出すわけです。札幌では、既に「STARTUP CITY SAPPORO」の構想があり、動きもありますので、そういったものをより強く推し進めていくことも併せてできるのではないかなと思っています。

このように経済や産業が創出されれば、生み出されたものが結果としてカルチャーにつながっていくと思うのです。札幌で生み出された何か、例えば、特定の名前を出さなくてもいいのかもしれませんが、初音ミクを生み出した会社がある北海道、札幌というように、札幌のイメージは初音ミクだと思っている人たちも実際には少なくないわけですので、波及したものがまた次の産業を生み出したり、まちのイメージをつくっていく、カルチャーになっていくということがあるのかなと思うのです。

さらに言えば、それが住んでいる人たちにとってのまちに対するコミットメントにもなると思うのです。北海道、札幌に住んでいて気になるのは、自分たちのまちへのコミットメントというか、思い出みたいなものは潜在的にあるのだけれども、明確にすごくいいまちだよねとみんなが自信を持って人に言うことが少ないような気がするのです。外から見るともっと自信を持っていいのにも思うこともあるので、そういったものがやっぱり明確

なカルチャーになるものであったりとか、その背景の具体例としても、ビジネスが生まれていることであつたりにつながっているような気がするのです。

そういった循環的などころがあるという観点からも、知的なものを生み出す、知的な想像の基盤となるとか、新たなまちの創出とか、インテリジェンスと言えるのかもかもしれませんが、そういったところまで突っ込んでも夢があつていいのではないかなと思ひました。

○平本会長 後半のほうでおっしゃつていたように、我々は、札幌に住んでいて、札幌はいい都市だと思うのだけれども、ここがすごくいいと強く言える部分があまりないので、もう少しコミットメントが生まれるようなビジョンであつてはどうかというご指摘はなるほど、そうだなと思ひました。

続きまして、オンラインでご参加の定池委員、お願いいたします。

○定池委員 私は、基本目標8として示していただいた防災・減災体制が整つた災害に強いまちに特化してコメントをさせていただきたいと思ひます。

資料4の中では、背景となる文言をいろいろ示していただいた上で基本目標8という言葉に短く示していただいたのですが、こちらは再検討が必要だと提案します。

理由は大きく二つあります。

一つは、防災・減災対策だけでは災害の備えとして不十分であるからです。もう一つは、災害に強いという考え方自体が時代遅れになりつつあるので、北海道をリードする、世界をリードする魅力ある札幌にしたいということであれば、この言葉ではないほうがよいと考えるからです。

このことを踏まえて少しお話しさせていただきます。

まず、防災・減災という言葉は、地震による破壊を防ぐ、風水害のときに堤防が壊れないようになっている、地震の後に雨が降つて2次災害が起きることがないようにするなど、被害を防ぐ、被害を減らすというニュアンスで一般に理解されていることが多いと思ひます。

また、法律で言うと、国の災害対策基本法では、災害対策の範囲は復興まで入っているのですが、防災の範囲だと復旧までとなっています。つまり、この基本目標8では復旧までしかカバーできていないこととなります。

ご承知のとおり、災害は、社会の課題をあぶり出す、そして、その弱いところを攻撃するという特性があります。また、どこかにボトルネックがあれば、そこを突いて被害を与えてしまうという特性もあります。私たち人間には限界がありますので、防災・減災体制を整えることはできても被害を完全に防ぐことはできません。

また、防災・減災の世界では、被害を減らすことと被害を受けた後の回復を助けることの2本立ての両輪で考えていくことが基本になっております。ですから、基本目標を立てる際にも、被害を軽減すること、回復を助けることの両方のコンセプトを盛り込んでいただければと思ひます。

前回の委員会では、胆振東部地震からの生活再建の途上にある市民に対してサポートが

必要ですよねというお話をさせていただきました。胆振東部地震に伴うブラックアウトで何日か大変だったねという経験をされた方が大多数かもしれませんが、いまだ地盤が直っていないから家に帰れないということもありますし、厚真町では畑を直すのにあと何年かかるなど、被害を受けたまま回復し切れていない方がまだたくさんいます。少数派かもしれませんが、被害を受けた時間よりも被害を受けた後の時間のほうが長いのです。

さらに、災害のサイクルやフェーズという概念では、事前の備えから復旧・復興、そして生活再建までカバーできて初めて全てを網羅できているという考えになります。ですから、札幌市が被害を減らすことと被害を受けた方を最後の一人まで支えるという姿勢を示すことができれば、どんな状況にあってもよりよく暮らせるということを市民に示す大きな指針となりますし、そのこと自体が大きな魅力になると考えます。

○平本会長 基本目標8そのものを全面的に見直す必要があるのではないかというご指摘と、それに対する背景の非常に分かりやすく、かつ、説得力のあるご説明だったと思います。

続きまして、オンラインでご参加の木村委員、お願いいたします。

○木村委員 私からも都市像と基本目標に触れていきたいと思います。

まず、都市像についてですが、私もよい言葉だと思いました。ただ、こういう都市像の文言というのは、多分、私みたいな一般市民の心を動かして、行動を後押しするようになるのだろうと思うのですが、正直、日常生活や仕事をする中で、これを振り返ったり、紐づけたり、後押しになるかにはちょっと疑問を持ちましたので、もしかすると企業で言うコーポレート・ナラティブみたいなものを参考にもう一回見直せるかなと考えています。

以前は、コーポレートアイデンティティーみたいな言い方をしていましたが、今は、顧客視点で企業の存在意義をナラティブに言語化していこうみたいなことがトレンドになっているのです。札幌市にとっての顧客が誰なのかはありますけれども、仮に、市民や札幌に置いている法人、関係人口、将来、札幌に移住したいという人も含め、そういう人たちがどういう行動を取る必要があるのか、その人たちの望ましい行動を追求するために札幌市はどういう助けができるかみたいなことを言葉に紡いでいくと市民の心と行動を後押しできる都市像の文言になるのかなと思います。ナイキの「Just Do It」というあの靴を履いて走り出そうのように、札幌に来てこんなことをやろうとできるのではないかなと。

そうすると、市民憲章は結構よかったのではないかなと思ったのです。ただ、今、振り返ると、あのときは、昭和30年で、そんなに創世記ではなく、これからまちをつくっていくみたいな表現でしたが、例えば、移住や企業誘致に重きを置くのだったら、札幌市としてはこういうふうに行動を後押しします、助けますみたいなことが含まれ、それが人の心を動かす言葉になったらいいのではないかなと思いました。

次に、私としては経済が気になるので、まちづくりの基本目標（案）の経済のところ

触れたいと思います。

関連して、SWOT分析も興味深く見せていただきました。ただ、もう一声で、国内外のまちと比較して、強みと弱みの取捨選択ができるのではないかなと思っています。国内だったら、例えば、福岡市が比較対象になると思いますし、海外だったらリゾート地のウイスキーみたいなところがあるかなと思います。

何でそんなことを言うかという、K i t a r a やスタートアップエコシティの国の認定が強みに挙がっているのは札幌市民としてはうれしいのですが、企業の立場としては外から見たときにそれが本当に強みなのかなと思うからです。札幌に住んでいる人が強みだと思ふゴリ押しのポイントではなく、ほかの都市と比較して、客観的に強みですと言えるものを取捨選択したほうがいいのではないかなと思います。ですから、もしかしたら、カスタマージャーニーマップでもいいのかもしれないですね。札幌を出た人が札幌に戻る時にはこういう思考回路で選んでいますとか、企業がいろんなまちが選択肢にある中で札幌を事業拠点に選ぶときには何をみているのかみたいなことを整理していてもいいのかなと思います。

そうしたとき、まちづくりの基本目標（案）の中の経済の目標とその重要概念は理解しましたが、誰を主体にしているのかというのが不明です。もしかしたらこれから分科会で掘り下げていくことなのかもしれないのですが、経済を活性化するためには、今いる人や企業に活発になってほしい、外からもっとたくさん来てほしいということになると思うので、主語と目的語を意識した内容になってほしいのかなと思います。

企業側から言うと、新規事業のフィールドとして、福岡や札幌というエリアを候補として挙げて、そこから札幌を選ぶみたいの流れになると思いますが、札幌を見ていると、札幌を選ぶのを待っているみたいになっていて、目標や重要概念にも正直そのスタンスが見える気がします。

福岡では、LINEから始まり、周辺のIT企業みたいなこともありましたので、札幌ぐらいの規模だったら、バイオ、AI、ITみたいに先に領域を決めるよりも、特定の企業に当たりをつけて誘致し、その企業の状態を基に集積する領域を決めていくこともできると思いますので、そういうことにつながる重要概念であり、目標を立てられるといいのかなと思っています。

先ほどの話に戻ってしまうのですが、札幌を商品だと思ったときに、どんな会社や企業が札幌を選んでくれるのかを顧客目線でもうちょっと掘り下げていけるかなと思っています。

最後に、経済、教育、人材に関わるのですが、スタートアップという言葉です。よく出てきているのですが、正直、レベル感を引き上げたほうがいいと思っています。企業が東京の学生起業家に目をつけていて、一緒に何かをやろうというときには、10億円で事業売却しているような学生を連れてきて、別に社員として雇うということではなく、M&Aみたいな形で仕事をするのです。学生が事業をつくるリソースとして、自分

たちでうまく領域を張ったり、そんなに事業開発するリソースを持っていないから企業を利用してみたい感覚で学生と企業がコラボしているのですが、それぐらいのレベル感ですね。今、とてもめぼしい起業学生のリストアップが終わっていて、次のプールとして、北大も含めた地方の国立大学がターゲットに入ってくるので、札幌市としても起業プログラムには力を入れたほうがいいと思いますし、裾野の起業プログラムに入る人たちのプールといいますか、小学生や中学生からアントレプレナーシップみたいなものを教育していき、土台を整えると、それが結果、経済にもつながるのかなと思いました。

北海道では、就職できない人が起業するといいますか、地元に残る人は、公務員、金融機関、あるいは、実家が事業をやっている、資格が必要な仕事、それらの優先順位が高く、会社務めできない人が起業するみたいな概念がありましたが、もうその次元ではないのですね。10億円の事業売却みたいところをターゲットに、アントレプレナーシップの教育をやり、そういう人が札幌ではないフィールドを選ばないように、そういう人がどうしたら札幌を選んで起業してくれるのかみたいな視点でいったほうがいいなと思っています。

○平本会長 私は、今、木村委員がおっしゃったことの一つ一つに納得がきました。

最初の都市像では、言葉はいいのだけれども、本当にこれが市民の心を動かすのだろうかというのは私も思っていましたし、基本目標も含めて、具体的なライバル、ある種の仮想敵と言ったら怒られるかもしれませんが、福岡とウイスキーなどを頭の中に想定しながら都市像や基本目標をつくっていくことの重要性ですね。

それから、文章にするときには、主語、目的語を考えなければいけないというのはおっしゃるとおりだと思います。

さらに、スタートアップのレベル感のお話は、まちづくり戦略ビジョンだけではなく、札幌市のベンチャー支援事業にも関わる非常に重要なご指摘だったと思います。

続きまして、川島委員、お願いいたします。

○川島委員 私からは、スポーツと健康づくりの観点から、基本目標について幾つかお話をさせていただきますが、基本目標そのものではなく、どちらかという、具体的な目指す姿になっているかと思いますので、ご了承いただければと思います。

まず、一つ目に、超高齢化社会への対応として、健康寿命の延伸についてです。

このたびの基本目標の考え方としては、まちづくりに共通する三つの重要概念が定められており、その一つに、ウェルネス（健康）が打ち出されています。このウェルネスの概念はとても広範囲なものですけれども、身体の観点から言うと、健康上のトラブルによって日常生活が限定されずに暮らせる期間と定義づけられておりまして、この健康寿命の延伸はとても重要なキーワードになると思います。

また、今回ご提示いただいた基本目標の検討のSWOT分析にありますように、札幌市民の健康寿命は全国平均以下となっております。この延伸の取組は大きな課題と認識されていると思いますので、既に目標、考え方の基本に内在しているかと思いますが、例えば、生活・暮らしやスポーツ・文化の分野の中に日常的な運動やスポーツによる心身の健康の

保持・増進、スポーツや運動を通じた健康寿命の延伸などを観点として加えていただければいいかなと考えております。

次に、次世代を担う子どもたちの体力の維持、増進についてです。

近年、子どもたちの体力や運動能力の低下が非常に問題視されておりました。令和元年度スポーツ庁の体力テストの結果では、今、小学生男子の低下が特に著しく、調査開始以来、過去最低となっているそうです。北海道では、小学生男子が全国平均をやや上回っている一方で、小学生女子、中学生男女とも平均を下回っているような現状です。

体力を低下させている背景にはいろいろな理由が挙げられておりますが、子どもたちの体力を考えると、小学校に上がる前の幼少年期の発育、発達や身体活動が非常に大切であり、幼少年期の体力は生涯の健康を左右するなどとも言われております。

このため、子ども・若者の分野に、幼少年期の子どもたちを含め、子どもたちが心身ともに健やかに育っていくために、いつでも遊ぶことができ、運動ができる場所や環境の提供、そして、それを適切に教えることのできる指導者、人材の育成などの観点も加えていただくとうろしいかなと思っております。

続いて、パラスポーツの関係ですが、スポーツを通じた共生社会の実現についてです。

札幌市では、今、障がいのある方が専用、または、優先的に利用できるスポーツ施設の建設について、専門委員会を立ち上げ、検討が始まっています。この先の冬季オリパラの開催には、ポテンシャルや強みを生かす観点から障がいのある方の活動や運動機会を拡充していくことが必要だと思っておりますので、例えば、パラスポーツの普及啓発を通じて共生社会の実現を目指すという目標も必要かと考えています。

最後に、先ほど来お話がありました、基本目標13に関して、観光という意味合いでお話しします。

現在、新型コロナウイルスによって、インバウンド旅行の需要はほとんど消滅しておりますが、アフターコロナやウィズコロナを見据え、札幌の都市空間や豊かな自然を生かしたスポーツ資源による観光コンテンツの造成が重要だと思っております。この中には、ウインタースポーツと書いてありますが、先ほどもお話しいただいたとおり、四季を通じた国際大会の誘致という考えを持っていったほうがいいかと考えております。

○平本会長 どちらかという、具体的な目指す姿についてお話をいただきましたが、健康寿命や体力低下の問題、さらに、スポーツ資源は四季を通じて考えるという重要なご指摘をいただいたかと思っております。

続きまして、岡本委員、お願いいたします。

○岡本委員 資料の順番に気になったところを簡単にお伝えしていきます。

資料2は、こういうページ構成でいきますというお話だったと思っておりますが、「私たちが取り組むこと」のところ「市民・企業など」と「行政（札幌市）」で分かれているのは非常によろしくないのではないかと考えています。

まちをつくっていくに当たっては両者協働で手を取り合っていることをお互いに進め

ていくことがとても重要で、別々にやっていくようなイメージを受ける表現はなるべく避けたほうが良いと思っているので、まず、それをお伝えします。

次に、都市像についてです。

大きな方向性や中身については今までご発言があった委員の皆さんのお話におおよそ同意しています。ただ、細かい話で申し訳ないのですが、例えば、2段落目の最後の「人口構造の変化にも影響を受けない都市」という書き方はちょっと夢見がちではないかなと思います。やはり、影響は受けるはずなので、人口構造の変化も積極的に生かすなど、現実を見た表現も必要なのではないかと思いました。

次に、中段のところに「雪まつりやアジア初の冬季五輪開催などの世界に誇れるプロジェクト」と書いていますが、昔取った杵柄を今こんなところを出して何がよいのかなと思ってしまいましたし、もう少しほかに誇れるプロジェクトはないのかなという市民目線の寂しい気持ちがありました。

さらに、資料4についてですが、先ほどの定池委員の防災・減災のご指摘はすごく大切だと思って聞いていました。僕が考えていたのは、積雪寒冷地であるので、冬のすごく寒いときに災害が起こることも想定しているということは表現しておくべきではないかなと思っています。その点は、ほかの本州以南のまちとは全然違うので、注意が必要かなと思いつつ見つけていました。

次に、私の専門である都市の話をしたと思います。

基本目標の18から20は、それぞれ分かるのですが、黒色の丸のSWOT分析をベースにしているところをよく見ると、都市の美しさというか、景観やまち並みの切り口がなく、本当にこれでいいのかなと思いました。

札幌のまちに本州から友達が来たとき、どこの建築を見たらいいかなという話を学生とするのですが、自慢できる建築が全くないですね。どちらかというと、合理的で利便性が高く、雪等の影響もあるので、のっぺりしたまち並みで、規格がそろっているのですが、そういう整然としたまち並みだけでなく、もう少し都市としての魅力を感じられる建築や都市の一部を創出できるようなものを目指していくことが必要なのではないかなと思っています。

もう一つ、最近注目されている、歩いて暮らせるまちの実現です。これは人に優しい快適なまちというところに入っているのかもしれないのですが、黒色の丸の説明では交通ネットワークというキーワードになってしまっていて、ここを意識してしまうと車両中心の表現だと読み取ってしまいかねないと思います。しかし、そうではなく、都心部では地下の発展もありますし、琴似のほうに行くと空中歩廊の延伸等で雪や寒さに対応する空間的な工夫などもあり、歩いて暮らせるまちの切り口は少しずつ成長していると思うので、それがきちんと伝わるような表現にしていく必要があるかなと思っています。

都市空間のところかというと、どれもある程度見えていたり、走っていたりするネタが書かれている気がします。でも、目標なので、あるべき姿の話を書くべきではないかなと強

く思っています。

最後に、基本目標（案）の中で、ユニバーサルとウェルネスとスマートについてです。片仮名が好きですよということなのですからけれども、片仮名でいくのであれば、最近注目されているキーワードとしてインクルージョンという言葉を目に挟んでいます。いろいろな個性や得意、価値観をそれぞれに生かして、みんなで伸びていくという切り口を表現しようとする言葉なのですが、そういうことも前向きに含めるような整理をしていくことも可能性としてはあるのではないかなと感じました。

○平本会長 資料2のご指摘はおっしゃるとおりだと思います。

また、いろいろ重要なご指摘があったのですが、あるべき姿をもっと書くべきだというのは私も感じていたので、そのご指摘は全くそのとおりではないかなと思いました。

続きまして、大西委員、お願いいたします。

○大西委員 私は、健康、保健・医療という観点から意見を述べさせていただきます。

都市像については、あまり具体的な表現を長々と書くところではなく、キーワードを適切に盛り込むことになるのだと思いますが、私としては「つながる」というキーワードになっているのは、コロナ禍で身体的なディスタンスもありますが、差別や偏見など、心のつながりが分断されるという状況もありますので、つながりを先に持ってくるという考え方については非常によいと思っております。

また、ユニバーサル、スマートに加えて、ウェルネスを重点項目として掲げ、さらに、今回、生活・暮らしを安全・安心の分野から独立させ、健康というキーワードで一つの領域をつくっていただいたのもよい点と考えます。

さらに、今回の脅威にもなっている少子高齢化と人口減少についてです。前回、高齢者がいかに活躍するかということ意見を述べさせていただきましたが、それを基本目標4に「生涯活躍できる」という表現で反映していただいた点もよいと考えます。

また、先ほど椎野委員や岡本委員もおっしゃっていたのですが、最近、社会疫学という領域で集団の健康を規定するのはどういう要因なのかが解明されてきています。そこに住んでいる個人の健康に対する意識、あるいは、健康行動も重要ですが、社会環境がそこに住んでいる人の健康を守るといった様々なエビデンスも出てきております。先ほどお話があったように、緑地の面積が多いところで死亡率が低い、公園の近くに住んでいると身体活動が上がって肥満の頻度が減るといった効果もあります。

また、コンパクトにまちをまとめて様々な機能を集約するところでは、先ほど空中歩廊の話がありました。今、スパイクタイヤが禁止になり、粉じんは減ったのですが、路面の状況から特に高齢者の冬期間の転倒リスクが高まっています。空中歩廊は、季節や天候に影響を受けないため転倒リスクが低くなることに加えて、身体活動も増えると思います。車に頼らない社会づくりが実は健康にとって非常によいと考えております。

さらに、生活・暮らしについては、市民や企業が健康意識を高く持つ、あるいは、学びも確かに重要なのですが、社会環境を整備することでそこに住んでいる人の健康を守ると

いう視点、つまり住んでいると自然と健康に導かれるまちづくりという視点も重要と感じています。

最近、行動経済学にナッジ理論というものがありまして、人間の行動心理に働きかけて、選択の余地は残っていても、ついつい健康にいい選択肢を選んでしまうようなシステムづくりが重要とされています。多くの方は、健康であるために生きているわけではなく、人生の目標をかなえるために健康が資源として必要という考えに基づくと、健康であることを自分の中で人生の目標の上位に順位づける方がいないのも実際のところであり、個人の健康意識を高めるという活動は重要なのですが、どうしても健康に無関心な方たちが一定程度存在しているのが実状です。そこで、生活・暮らしの中に、健康意識が低い人も札幌市に住んでいることによって自然と健康に近づいていく、都市環境などによって健康が守られるといたしますか、環境でも健康を守っていきますというコンセプトが盛り込まれるといいのではないかと考えています。

また、資料5に目標の考え方が幾つかありますが、生活・暮らしのところの医療・介護体制の整備、高齢者・障がいのある人等の支援というのは、病気になってから、あるいは、障がいを持ってからの対策という気がします。しかし、生涯現役でいるためには若い頃から健康を維持するという考え方も重要になりますので、病気やけがの予防という観点をキーワードとして盛り込んでいただくといいのではないかと考えております。

○平本会長 社会環境の整備で自然と健康になるというのはとても魅力的なコンセプトだと思いますので、そういったことも札幌市の一つの売りになるようなまちづくりができればいいなと思いました。

それでは、浅香委員、お願いいたします。

○浅香委員 今、大西委員がおっしゃっていましたが、今回、提案された基本目標（案）では、生活・暮らしの項目が独立して新設されたことにより、市民の方々にとっては一層分かりやすいものになったのではないかと考えております。

一つだけ、再度、お願いしたいことがあります。

現在の戦略ビジョンの戦略編の中に、自ら支援にたどり着けない市民の増加に対応するため、支援を必要とする市民を適切に把握する体制を構築するという内容が書かれていますが、これは、現在のビジョンをつくり上げようとした頃、市外から転入してきた障がいのある姉妹が行政などへの助けをためらったために衰弱死してしまったという痛ましい事件があり、重要な目標として現在のビジョンに記載されたものと記憶しております。

今は、ワクチンの接種予約一つを取っても大変なときです。私どもの団体では、予約を取るのが難しい仲間には声をかけ合って進めておりますが、会員といってもたかが1割にも満たない数です。きっと接種を希望していても予約までこぎつけられない方がまだたくさんいらっしゃるのではないかと推測しております。

ワクチン接種を例に挙げましたけれども、自ら発信することができないがゆえに、障がい者に限らず、昨今、高齢者や小さなお子さんの不幸な事件などがたくさん起こっている

のが現状です。不幸な事件をなくすとともに、自らの境遇や生活実態をなかなか発信できない方々のためにも、これまでのビジョンを土台にしながら、様々なコミュニティーを形成する団体や市民に対し、目的や目標を浸透させ、広めることこそがこの新たなビジョンを生かす最も大切なことではないかと思っております。

具体的なことは申し上げられませんが、今後の専門部会などでより掘り下げた中身につくり上げていただければと思いますし、また、そういう意見を申し上げたいと思っております。

○平本会長 高齢者やお子さんの不幸な事件を防ぐような取組をこれから具体的に検討するべきだというご指摘かと思えます。

それでは、梶井副会長、お願いいたします。

○梶井副会長 既にたくさんのご意見をいただきましたので、私から新しく付け加えるようなことはないかもしれませんが、都市像について申し上げたいと思えます。

多くの委員の方がご指摘されましたように、都市像のところはこれから札幌がどういう方向に向かうのを市民の皆さんに示す「つかみ」になる部分ですので、限られた字数にはなるでしょうが、多くの共感をどれだけ呼び込めるのかに集中して表現していただきたいと思っております。

そのためには、まず、分かりやすさだと思います。ちょっと用語が硬いかなと感じる部分があります。市民の方々が未来の都市像をイメージしやすいように、あるいは、これは行政だけが取り組むものではなく、皆と一緒に目指して、多くの人にコミットしていただかないと駄目なものだということ、他人事ではなく自分事に感じられるような書きぶりが必要だと思っております。

例えば、「目指します」というところが二箇所あります。一つは、「人口構造の変化にも影響を受けない都市を目指す」というところですが、委員からもご指摘がありましたように、これを市民が読んで本当にイメージできるかです。それから、もう一つは、「コロナ禍によって加速する社会変革にも果敢に挑戦し、躍動し続ける都市を目指す」というところですが、社会変革とはどういうイメージなのか、そこもちょっと難しい気がしますので、もう少しかみ砕いて書くといいのかなと思えました。

目指すべき都市像の「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」や「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」という方向性が前半の具体的な説明で説得力を持つようにしてほしい。そこから基本目標へと流れていき、こういう取組をやっていけばその都市像に近づくのだなと分かるようにするのです。そうした流れをつくることを意識すると市民の共感や巻き込みをさらに促進できるのかなと感じました。

○平本会長 私のタイムマネジメントが悪く、本来でしたら終わる時間を過ぎているのですが、今、梶井副会長がおっしゃったことはとても重要だと思いますし、言うか言うまいかで迷っていたのですが、都市像についてのご意見が結構多かったので、私からも少しだけ関連してお話しさせていただきたいと思えます。

私が事務局から事前にご説明をいただいたときに思ったことですが、都市像について、札幌市、北海道というところを仙台市と宮城県や福岡市と福岡県に置き換えても雪まつりと冬季五輪を除けば全部が当てはまってしまいうらい普遍的な表現なのです。それはそれでいいとは思いますが、札幌らしさが足りなくないですかと申し上げたところ、それは都市像の書き込みのところで札幌らしさを出しますということでした。しかし、今、梶井副会長がおっしゃったように、つかみのところで共感を呼び込むことができるかという、そうではないかなと思いますし、木村委員がおっしゃったように、市民の心を動かしていないのではないかと感じるのです。

都市像が一番上にあって、そこからブレイクダウンされ、基本目標などが出てくるということを考えると、やはり、この文章表現の魅力はとても重要なのではないかなと思います。もちろん、今さらちゃぶ台をひっくり返し、もう一回やり直しだと申し上げるつもりはありませんが、委員の皆さんがおっしゃったことをできる限り反映していただければありがたいなと思いましたので、それだけ申し上げたいと思います。

今、一巡したのですが、ほかの委員のご発言などをお聞きになって追加で発言されたい方がいらっしゃったら、挙手の上、ご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。
○山本（一）委員 災害についてご専門の立場からいろいろなご意見をお聞かせいただきましたが、定池委員のお話はすごく重要な気がしています。やはり、都市と災害がつながると非常に多くの命が失われることもありますので、ぜひともご意見をいろいろお聞きした上で充実させるべきではないかと思っています。

○平本会長 今日ここでやると時間が超過してしまうので、専門部会でぜひご議論をいただければと思います。

岡本委員の冬の重篤な災害についての想定が必要だというご指摘も大変重要だと思いますし、本来でしたら、今、定池委員に少し解説いただくべきだと思うのですが、時間の関係もありますので、今回はそれをお許しいただければと思います。

なお、定池委員には専門部会に加わっていただき、その部分の掘り下げを是非していただければと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

ほかにご発言はございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○平本会長 続きまして、議題（3）の専門部会の設置についてです。

事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局（本山企画課長） それでは、資料6の専門部会構成案をご覧ください。

より議論を深めるため、今後は、審議会を三つの専門部会に分け、検討を進めてまいりたいと考えております。

三つの専門部会が扱う分野は左端の列にお示しをしております。また、それぞれの専門部会の構成員につきましては、各委員の専門分野を踏まえた構成案とさせていただきます。

なお、次回の審議会は、部会ごとの開催を予定しております。

○平本会長 ただいまご説明のありました専門部会についてご質問やご意見等はありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○平本会長 それでは、時間が超過してしまいましたが、本日の審議はこれで終了したいと思います。

委員の皆様方、本当に重要なお指摘、それから、私自身も全然気づかなかった視点等をご提示いただきまして、大変ありがとうございました。

それでは、事務局から事務連絡をお願いいたします。

○事務局(本山企画課長) それでは、次回の会議についてご説明を申し上げます。

次回の会議については、第1回目の専門部会を9月頃に予定しております。

日程調整等につきましては、三つの部会ごとに、委託業者であるノーザンクロスを通じて、後日、改めて連絡させていただきます。

なお、次回の議題につきましては、今日の基本目標や目指す姿、各主体が取り組むことについてご議論をいただきたいと考えておりますが、詳細については改めてご案内させていただきます。

3. 閉 会

○平本会長 それでは、これで本日の審議会を終了させていただきます。

どうもありがとうございました。

(会議後の追加コメント)

○定池委員

1 「防災・減災」について

他の委員の話聞いて、札幌市は雪を魅力と捉えているだけでなく、積雪寒冷期の災害想定もしている（雪・寒さが脅威となる場合についても検討している）ということも何らかの形で示した方が、「さまざまな方面に目配りをしている」という理解も深めてもらえると考えました。

2 都市像について

他の委員達もおっしゃっていたように「札幌ならでは」「心に届く」要素が少ないように考えています。

また、冒頭の文章は、たとえば、「札幌は、北海道を代表する自然豊かな大地の中の都市です。」のように、市民のアイデンティティの根幹となる（なあってほしい）、ポジティブまたはフラットな表現が望ましいです。今回提示されたような文から始めると、「暗い未来が待っている」という印象を与えかねません。その点、再考が必要と考えます。

そして、「雪は脅威である」という見方があるかもしれませんが、世界でも類を見ない積雪量の地域に、これだけの市民が生活をしていること。そして、年に何度か雪の脅威にさらされることはあるけれども、多くの場合上手に付き合っていること、そして雪の恵みも活かして暮らしていることについても、ポジティブな発信をすることが大切だと考えます。雪は、国内の同規模の都市にはない札幌の特色であり、他都市にはできない発信ができる大きなポイントの一つと考えています。

○山本（一）委員

定池先生はご専門のお立場から、「基本目標 8「防災・減災体制が整った災害に強いまち」こちら、再検討が必要だと考えます。」と言われ、理由として、「①防災・減災対策だけでは災害の備えとしては不十分であること ②「災害に強い」という考え方自体が時代遅れになりつつあるため、北海道をリードし、世界に打って出る札幌市には もっといい言葉があると考えます。」とのご意見を言われました。お聞きして私は札幌市が進んで行くべき道筋にとって重要なこととおっしゃっていると思いました。

「災害は社会の課題をあぶり出し、そこを攻撃するという特性があります。どこかにボトルネックがあれば、そこを突いて被害を与えます。防災・減災だけでは被害を防ぎきれないからこそ、被害を軽減することと、被害を受けた後の回復を助けることの 2 本立て、両輪が必要です。」とのご意見は、まさに札幌市が「都市としてイノベーションを起こすべき課題とポイント」をお教え頂いた、重要な言葉と言えらると思います。

例えば、コロナ禍が長く続く中、もともと弱い立場の母子家庭はまさに今、苦しい思い

をしていることと思います。これもまた、ボトルネックを突いて被害を与えている例とも言えると思います。この例もまた、「被害を軽減することと、被害を受けた後の回復を助けることの 2 本立て、両輪が必要」と言えます。

また、「札幌市地域防災計画」の被害の想定の中で、冬季に凍死者が激増するとの記載がありました。もしも冬季の災害で死者が多く出た場合には、札幌の雪のポジティブなイメージは無くなります。想定された死者を出さないようにするにはどうすればいいのかを真剣に考え、早期に実現することが重要です。

例えば、再生可能エネルギーの普及を促進する場所として、避難所や病院、公共施設など災害から市民を守る場所を優先して設置すると、被害の軽減のみならず、再生可能エネルギーの促進とエネルギーの地産地消の促進が命を救うことに貢献しているというポジティブなメッセージを出すことが出来、札幌市の都市としてのイメージが高まるのではないのでしょうか。

以上